

2005年、英文学科の副専攻コースとして、翻訳・通訳コースが設置され、このコースの学生は、英語の教職課程、日本語教員養成課程の3つを同時に履修することはできなくなった。2005年以降の履修生の減少に関係していると考えられる。

## 5) 修了生の進路

本課程の修了生は、卒業後、その多くは一般企業に就職するが、大学院へ進学し専門家への道を目指す者も少なくない。日本語教育を専門としている者の多くは、国内外の大学、日本語教育機関の日本語教師となって活躍している。また、中学・高等学校の教員（英語、社会、数学、情報）となり、その職場にあって外国につながりを持つ児童生徒の受け入れや国際交流に貢献している者もいる。その他、国際交流・国際協力関係の機関や地方自治体の職員、地域の日本語教室など、活躍の場は広がりをもっている。また、外国出身の人々と職場で同僚として仕事をしている人も増え、企業内での研修に携わることもあるようである。過去6年間の修了生の進路を表3に示し、修了者数および教員免許取得者数を表4に示す。現在の職業については、アンケートへの回答者に限られるが、56ページのアンケート結果を参照されたい。

今回の調査結果に基づくものではないが、卒業後の修了生とのやり取りからは、必ずしも卒業時の進路がそのまま維持されるわけではなく、ライフステージの変化に伴い、変化していくことが見えてくる。

例として、次のようなケースがあげられる。

- a. 中学・高等学校教員（英語）＋地域の日本語ボランティア
- b. 中学・高等学校教員（英語）→国際交流機関職員＋国際理解教育プロジェクト
- c. サポート校→中学・高等学校教員（数学）
- d. 企業→企業内日本語研修
- e. 企業→マニュアル等の翻訳
- f. 地方自治体職員→国際課としての日本語関係業務
- g. 専門学校職員（英語担当）→日本語担当→大学留学生課
- h. 日本語学校教師（海外3カ国）→入国管理局職員
- i. 技術研修機関→大学院（開発・海外）
- j. JICA青年海外協力隊→大学院（開発・海外）→JICAジュニア専門家

（林 2008）

日本語教育関係の仕事への道に進んだ修了生の場合も、以下のような多様なキャリア・パスが見られる。

- a. 大学院（修士）→日本語学校（海外）→JICA青年海外協力隊→大学院（博士）  
→大学非常勤講師
- b. 大学院（修士・英語教育）→国際交流基金（JF）青年日本語教師派遣（TAP）  
→JF青年日本語教師→JF日本語教育専門家→大学非常勤講師（海外）
- c. 企業→国内外大学院（修士）→大学非常勤講師（国内外）
- d. 企業→大学日本語インターン（海外）→日本語学校非常勤講師→専任講師
- e. 日本語学校教員養成コース→日本語学校非常勤講師→専任講師
- f. 地域の日本語教室→本学養成課程→地域の日本語教室

（林 2008）

卒業後、一般企業に就職したのち、大学院を経て、日本語教育の道に進む例もあり、様々な機会をとらえて、日本語教育関係の仕事に就いていることがわかる。また、キャリア・パスからだけでは見えてこないが、結婚、出産という女性特有のライフステージを経る中で、仕事と生活とのバランスを取りつつキャリアを重ねている様子が卒業生の話からうかがえる。修了生の進路については、「ライフ・パス」<sup>注</sup>として、長期的に見ていく必要がある。

注：「ライフ・パス」については、加納弘勝編（2008）を参照。

#### <参考文献>

- 加納弘勝編（2008）『現地と世界をつなぐ私たちの仕事』津田塾大学オープン・リサーチ・センター
- 津田塾大学英文学科日本語教育委員会（1997）『津田塾大学日本語教員養成課程報告書－設立の経緯と展開（1990～1995年度）－』
- 日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議（2000）『日本語教育のための教員養成について』文化庁
- 林さと子・八田直美（2000）「接触体験を重視した日本語教育実習－ネットワーク型実習へー」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会 pp. 154-159
- 林さと子（2008）「課程修了生の進路に見る日本語教員養成課程の役割と可能性」『大養協論集』大学日本語教員養成課程研究協議会 pp. 32-33